
神様の・・・

フェンリル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の・・・

【Zコード】

Z2941D

【作者名】

フ・ンリル

【あらすじ】

彼女は声が出ない。そして、とある屋敷のメイドをしていく。まだ、序章のはなし。

プロローグ（前書き）

北欧神話をモチーフにしています。

プロローグ

オカアサン。

私は大好きだつたんだよ。

私
愛して欲しいって願つてた。

私、ずっと信じてた。

どんなに殴られても、嫌われても。

なのに、
酷いよね。

私を売ったなんて

卷之二

•
•
•

夢は見続けたいものなのよ・・・

ずっと、夢の中で幸せに

「起きる〜。」

・・・・。

ドスンと、部屋に鈍い音が響く。

自分がベッドから落ちたからだ。

「 わあ、朝は早いわよ〜」

フ・・・フレイヤさん・・・。

慌てて起きて、朝の準備をする。

あまり似合わないメイドさんの格好をする。

眼帯をキュッと結ぶと、軽い朝食を食べ、屋敷の掃除に大忙し。

「・・・・」

私は声が出ない。

理由は分からない・・・。

・・・分からないふりをしてるだけかも・・・。

でも、仲間はこんな私を受け入れてくれる。

だからとてもありがたいと感じてる。

「おつまみ屋」

つ
・
・
・
！
！

後ろから飛びついて慌てて身構える。

・
・
・
口、
口半様
・
・
・
・

一眼帶、朝から掃除とは感心だね」

小柄で、くりつとした目の持ち主。

口ヰ様は主人の一人に値する。

私より一つ一つ筆下しもだつたハズ。

つか、眼帯めがねであたなせめてほしいや・・・

確かに眼帯してゐたが、本當、悪戯好きだね。ヰ様は、

⋮

・
・
・
あれ？

今日、学校じゃ・・・急がないとダメじゃないですか？

雰囲気で感じてくれたのか、口キ様は怪しい笑いを見せる。

「眼帶い～・・・今日は色々やる事があるんだよなあ～・・・」

な・・・。

この笑い方は大抵、そつ、悪事を考えてる・・・命をかけてもいいわっ！

「ロキ、お前朝から姿が見えないと思つたら・・・・・・」

と、ロキ様の動きが急に固まる。

どひやら、声の主は私の後ろにいるひじい。

「わあ、早く準備しろつーーーーー！」

「ト・・・トール・・・・」

赤毛の私より頭一つ二つ大きい男性。

ちなみに私より一つ年上だ。

この方も、私の主人の「一人」。

「朝から彼女に迷惑を掛けるなつ」

体格的に不可抗力な口キ様はあつさりトール様に連れて行かれる。

「はあ～なあ～せえ～・・・・・・・・！」

口キ様の声が段々と聞こえなくなると、私は再び仕事を続行する。この掃除が終わったら、ちやんとした朝食が食べれるからね。早めが一番。

「・・・・・は体力的にも精神的にも何ら問題はありません」

「そりか・・・良かつた」

ほっと、安心した溜息をつく。

「我の「片割れ」だからな、彼女は・・・・・

「そうですね」

「我の片割れ・・・とは言つても、性格も顔も何もかもが違つ・・・

「

「唯一一緒にいるのは、そのただの人間や「神」より遙かな「力」を持つ
つていることですね」

「・・・・・」

「まだ、時間はあります」

「そうだな」

「彼女は・・・まだ自覚をしていません」

「・・・・・」

「そして、その他の「神」もまた・・・・・」

「我々は何も手出しできないのか」

「はい」

「そうか・・・・・」

「まだ、時は満ちていません、まだ・・・・・・・・」

ハジマリ（前書き）

彼女が目を覚ますと、主人の「一人」ロキのせいで書庫に閉じ込められていた。と、ロキは地下への階段を見つけるが

ハジマリ

空が枯れている。

すべての木々もあつといつ間に枯れ、

そしてすべての生物が死に絶えた。

洪水は止まることを知らず、生き物といつ生き物が悲鳴を上げ、息絶える。

私はただひとり、立ちぬく。

涙が地面に落ちても、すぐに吸収されて乾いてしまう。

「・・・・・ラクナログ・・・・・・」

私は、ぽつりとその単語を呟く

•
•
•
h

•
•
•
•
た
•
•

卷之三

せつかひ誰?

私を呼びかけるのは
・
・
・
・
・

とて遠くで…近い…声…

「監禁れ
つん」

— — ! ! ! ! !

息かかるべから近いシタジツ

読書中に毎晩をしていたらしこう。

正確に言えれば、屋敷内の地下にある書庫の整理中だ。

え？何で本を読んでいたかつて……？

・・・

・・・

・・・本好きの本能が勝手に働いて・・・。

・・・

・・・だ、だつて面白い本がいっぱいだもん・・・。

いや、セイジやなくして・・・何でロキ様が？

「学園から脱そ・・・早退してきたんだよ」

「・・・・・」

怪しき。

「眼帯、仕事をサボつてたコト、フレイヤやセイジで叫んでるやつは、

笑い、

「眼帯、仕事をサボつてたコト、フレイヤやセイジで叫んでるやつは、

「一、」

性悪だ・・・。

む～っと口を膨らますと、急いで本を整理して部屋を出て行こうとする。

「あ、そうだ」

ガチャガチャガチャ・・・

「そのドアな」

ガチャガチャガチャ・・・

「今、開かないんだよなー」

ガチャガチャガ・・・・・チャ・・・・・

え？

開かない？

音速のスピードで振り返ると、ロキ様が悪気がなさそうに笑う。

「ちよっと、ドアをいじくってたりて～何か壊れて」

・・・

・・・

ビー・・・ビーすんのよ・・・！――！――！

無言（ところか声が出せない）でペーくつてると、ロキ様は周りをウロウロして、

「あ、地下発見」

え？

整理してた時、そんなのあつたけ・・・・・?

「どうする、眼帯？行つてみる？」

こんな書庫、とてもじゃないけど人が来ない。

あーでも、来週ぐらいまで待てば一人ぐらいは・・・・・

・・・

・・・

・・・そこまで生きていられるか不安だけど。

私一人ならともかく、ロキ様がいるわ。

こうじうときのロキ様は結構頼もしいかも。

「くわと、静かに頷くと、ロキ様は

「じゃ、行つてみるか」

地下っぽいところは階段が下へ下へと繋がつていてる。

上に行きたいんだけど・・・大丈夫かな・・・。

・・・

・・・

・・・

地下の地下って結構寒い。

そして、酸素が薄い気がする。

といふか、空気が古い気がする。

ランプの火が唯一の灯りだ。

「うーーー、あ、やつと地面だ」

ロキ様がリードしてくれるからありがたい。

とんつ

不思議な事に、砂埃がたたない。

そういえば、蜘蛛の巣も全然無かつたな・・・何故?

・・・・ガルル・・・・・

さつき、何か聞こえなった？

け・・・獣の様な・・・

口キ様・・・

酷く不安な顔をしているのか、口キ様はぽんと頭をたたくと、

「大丈夫大丈夫っ」

・・・

今からでも上に戻つても問題ない気がするけどな・・・

もしかしたら、戻つてこない私とか心配して来てくれる人がいるかもしぬれないし・・・

でも、足が止まらない。

前へ前へと勝手に進む。

・・・

・・・何でだらう・・・

「ランプの灯りでしか分からぬいけど、」Jの部屋は相当広いだらう。

なかなか壁がないし。

・・・蜘蛛の巣や埃が全く無いことこのはやつぱつおかしい。

毎日誰かがずっと掃除をしている?

でも、雰囲気的に誰も使ってない・・・。

・・・

と、急に、可愛らしい女の子の声が聞こえた。

「お久しぶりです、お父様」

「え?」

口キ様がじつちをぐるぐると見る。

「眼帯、せつときお前蝶つたか?」

ブンブンと首を振る。

事実だし。

「…………誰か、いるのか？」

どうせひびきで聞こえたらしい。

「…………私のこと、忘れやつたのですか…………？」

返事がすぐに返ってきた。

近いのか遠いのかよく分からぬ。

「姿を見せる」

口キ様がこんな真剣な顔をしているのを見たのは初めてだ。

やつぱり自分も女の子なので、口キ様の服をちょっと握る。

「・・・・・はい・・・・・」

ボウツ

本で読んだことがあるみたいに、いきなり周りの照明が灯される。

私が想像してたどおり、この部屋はとても広かつた。

例えるなら・・・そう、ダンスホールだわ。

私達が少し離れた所に声の主がそこにいた。

ロングヘアーで少し髪の毛が巻いてて・・・片目が髪の毛によって隠れている。

「尊ひの、全部……おれてるのですか……」

「意味が分からない……お前は一体何なんだ?」

ロキ様の尊ひ。

後ろでじりへじと頷く。

「……」

少女は少し何かを考えているようだった。

「私は……お父様の娘です」

?……やつぱり意味が分からない

「で、お父様つてのは誰だ？」

口キ様が喋れて良かつた・・・。

私は喋れないから、もしこの状況が私一人だけだったら別の凄く困る。

とこつよつは、せりあと上に上がつてると細ひねびぬ。

なーんて、あれこれ考えていふと、少女はポツリと答えた。

「・・・・口キ様の娘です・・・・」

予想外。

感想を言うには、難しい。難しすぎる。

この娘、もしかして電波・・・？

「なつ・・・ななな・・・何で俺より年上っぽいお前が俺の娘なんだ?!」

口キ様も動搖が隠せないみたいだ。

と、少女がクスリと笑う。

「アナタの本当の姿は邪神ロキ。本物の神サマです。

そして、私はヘルと申します。

お父様・・・ロキ様の娘で、冥界の番人をしています」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2941d/>

神様の・・・

2010年10月22日13時49分発行